昭和二十七年十一月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
（通第四十四号）

慈光

第四卷・第十一號

目次

皇太子聖徳奉讃……（1）
聖人のうしろ姿の教化……花田正夫（2）
日本教化の源流（二）……福島正雄（7）
私の信仰……和才誠司（9）
凡禿ノート（三）——信仰と体験——……長岡高人（11）

皇太子聖德奉讃

愚秀善信作

佛智不思議の誓願を　聖德皇のめぐみにて　正定聚に帰入して　補処の彌勒のごとくなり。
救世觀音大菩薩　聖德皇と示現して　多々のごとくすてずして　阿摩のごとくにそひたまふ。
無始よりこのかたこの世まで　聖德皇のあはれみに　多々の如くにそひたまひ　阿摩の如くにおはします。
聖德皇のあはれみて　佛智不思議の誓願に　すすめいれしめたまひてぞ　住正定聚の身となれる。
他力の信をえんひとは　佛恩報ぜんためにとて、如来二種の廻向を　十方にひとしくひろむべし。
大慈救世聖德皇　父のごとくにおはします。大悲救世觀世音　母のごとくにおはします。
久遠劫よりこの世まで　あはれみましますしるしには　佛智不思議につけしめて　善悪淨穢もなかりけり。
和国の教主聖德皇　広大恩德謝しがたし　一心に帰命したてまつり　奉讃不退ならしめよ。
上宮皇子方便し　和国の有情をあはれみて　如来の悲願を弘宣せり　慶喜奉讃せしむべし。
多生曠劫この世まで　あはれみかぶれるこの身なり　一心帰命たえずして　奉讃ひまなくこのむべし。
聖德皇のあはれみに　護持養育たえずして　如来二種の廻向に　すすめいれしめおはします。

已上　聖德奉讃　十一首

聖人のうしろ姿の御教化

花田正夫

慈光誌にも一度寄稿して下さつたことがあり、今はすでに故人になられた鹿兒島の藤等影師の著書の中に「聖人のうしろ姿の御教化」といふ一句があると、先日福島先生から承りました。著書の内容については、先生もお話し下さらず、私もお尋ねしなかつたのでありますが、この一句は心憎いまでに聖人の德風をあらはされてゐることに驚いたのであります。

「うしろ姿」とは、聖人が御自ら、ひとへに阿彌陀佛を仰いでゐられる御姿で、私共の眼には聖人のうしろ姿が写つて来るのであります。「御教化」とは、そのまんまが、私共に無限の御導きとなつて下さるのであります。このことは聖人の御著書の何処にも一貫してゐる御精神でありますが、ことに聖人の御晩年の言行録とも申すべき歎異抄には、あらはに拝見出来ることであります。

たとへば、聖人の常の仰「彌陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業を持ちける身にてありけるをたすけんと思し召したちける本願のかたぢけなさよ」などは、昇る朝日を身一つにうけられての滿腔の讃歎とでも申すべきであります。然し私共には聖人はうしろ姿であります。

また関東からはるばると身の危險をもかへりみないで京都に聖人をたづねられた御同行を前に「親鸞におきては、ただ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしとよきひとの仰を被りて信ずるほかに別の子細なきなり。云云。たとひ法然聖人にすかされまいらせて念佛して地獄におちたりともさらに後悔すべからず候。云云。詮ずるところ愚身の信心におきてはかくの如し」と坦々として自信を語られる聖人はそのまま後姿を拝するのであります。

「うしろ姿の教化」それは私共にとりましてはまさしく還相の菩薩の教化であります。と言ひますのも真の菩薩は自らの正しき道を飽くまでも歩み續けられて、衆生を教化し調伏しようといふはからひがましまさぬのでありますが、その德風に触れる者は自然にその感化をうけてゆくのであります。これと反対に私共はよく「不孝な子」といつ

て親に縦順でない子を叱りますが省みて自分が親に仕へた姿を思ひます時、その不孝な子と同様なことを続けて来たのであります。して見れば白紙同様な小供の心に親不孝な手本を見せて来たのでありまず、子は親の鏡と申します。するとそこに自分自身の自画像を見せしめられることであります。それでゐて子を叱る、そこにその叱りは空虚なものとひびくのでありませう。菩薩は御自ら正しい道を歩まれるそこに自然の感化があらはれて衆生は調伏せられて行くのであります。

「うしろ姿の教化」それは真実なものに遇ひ奉る人の自然の姿でめります。私は他山の石として孔子の「述べて作らず、集めて大成す」と云ふ述而篇の金言を思ひ出すのであります。孔子のこころを申せば「自分は三皇五帝の昔の聖賢の教をそのまま仰いで、身に頂いてゐるばかりで、それをそのまま述べてゐるにすぎない。そしてその教を拾ひ集めて書にしたばかりで、別に珍らしく自分が作り出したものではない」といふことであります。聖人は孔子のこの御心に通じ給うたと見えて教行信証の中に、愚禿親鸞述、愚禿親鸞集と、自署して居られます。

更にエマーソンの論集に「若し人がまことなるものを見出したならば、自分のはからいは無用となつて、ただ真実なるものが放つ光線の通路になるばかりである」と述べて居ります。これも孔子の心に通ふものであります。

聖人は、正信偈の結句として「弘教の大士宗師等、無辺の極濁悪を拯済したまふ。道俗時衆共に同心に、唯高僧の説を信ずべし」と述べられてゐます。これが真実なるものに遇ふおのづからなる御姿であります。

私はそこに「如是我聞」と経のはじめに常に述べられてゐる阿難尊者の佛陀に信順せられた姿を仰ぐのであります。如是我聞、是の如くわたくしはお聞き申しました、佛陀の仰せ通りであります、私が加へたものも滅じたものもありません、との無私な尊者の心のひびきであります。私共は續経の端初におきまして尊者のこの御心に触れて、自らの憍豪な姿が照らし出されるのであります。聖人の御心がそのまま尊者の心に通じ、佛意がそこから流出されるのであります。

斯うした聖人は「わが弟子ひとの弟子といふ争論の候こともての外の子細なり」と非常に悲しんで居られるのであります。「ひとへに彌陀の御催しにあづかりて念佛申す人をわが弟子と申すこと極めたる荒涼のことなり。つくべき縁あればつきはなるべき縁あれば離るることのあるをも、師にそむきて人につれて念佛すれば往生すべからざるものなりなんど云ふこと不可説なり、如来よりたまはりたる信

心を我物顔に取りかへさんと申すにや返すがへすもあるべからざることなり云々」と聖人の寛容な他の御言葉に聞くことの出来ない、強く、いかめしいお叱りの声を聞くのであります。「親鸞は弟子一人ももたず候」何と言ふすつきりとした、ただ恍惚としてみとれる御信境でありませうが。そこに私共にとつてはおのづと三界の大導師としての聖人の御徳を拜するのであります。

斯様に強く叱られる聖人はまた八十八歳の最後の珠玉の如き御文、自然法爾章に「小慈小悲もなき身にて、名利に人師このむなり」と痛切に悲歎せられつつ、そのままに又聖人の常の御姿である、「うしろ姿」に転じて居られるのであります。

又さうした「うしろ姿」になられるには、聖人が御自身の持たれてゐる親切とか同情心といふものの無力さを諦観せられてゐるからであります。「聖道の慈悲といふは、ものをあはれみはぐくみ、かなしむを言ふ。しかれども思ふが如くたすけとぐること極めてありがたし」と、その慈悲心の未通らない、必ず行き詰つて了ふより外ないことを信知せられてゐるのであります。「小慈小悲もなき身にて有情利益は思ふまじ、如来の願船いまさずば苦海をいかでか渡るべき」との御言葉も、その心の底をつかれてゐるものであります。

われとわが身をどうすることも出来ぬ身、まして人を救ふなどとはもつての外の潜越なことであります。わが上にも、人の上にも、徹塵もよくすることの出来ぬ身に、唯一無二の自利利他円満の如来の本願の船がまします。本願の自在力がまします。私共といたしましてはこの自利利他円満の本願の大船に乗せられてはてしない生死の苦海を渡らせて頂くばかりであります。そこに我身を救ひ遂げて下さる本願の自在力がそのまま、我身を縁として他を救ふ光と転じて下さることでありませう。

この聖人の「うしろ姿の御教化」を通じて、瀝々然として浮彫せられるのが天親菩薩であります。聖人は法然聖人に帰せられて綽空、聖徳太子の夢の告げによつて善信、更に御流罪以後親鸞と号して居られますが、綽とは道綽、空とは源空、善とは善導、信とは源信。親とは天親、鸞とは曇鸞、であります。聖人の御心の歩みが御名においてはつきりと現れて居りますが、一番聖人が御用ひになつたのが親鸞の二字であります。これは天親と曇鸞、即ち天親菩薩の浄土論と曇鸞大師の浄土論註が親鸞聖人の生命であつたと申すも過言でありますまい。ことに聖人の拜まれた御本尊は「帰命尽十方無碍光如来」の十字名号でありました

ことは萬人衆知の事実であります。その十字名号の上段に十八願文、下段に淨土論の初めの偈文を自書せられて、生涯の本尊とせられたのであります。そして更に淨土論のことを「一心の華文」と讃仰して居られます。

それまで聖人が渇仰せられる天親菩薩の淨土論には「世尊よ、我一心に尽十方無碍光如来に帰命し、安樂国に生れんと願じ奉る」と申されてゐるのでありますが、この天親御自らが「一心帰命」せられてゐる、所謂「うしろ姿」となつて居られるのであります。それを正信偈では「群生を度せんがために一心を彰はす」と聖人は頂いて居られます。これが、天親菩薩の「うしろ姿の御教化」を聖人御自らが被つて居られる御姿であります。

又「願作佛心即度衆生心」と言ふことを聖人は淨土論から特筆せられ和讃に述べられてあります。即ち「ひとすぢに尽十方無碍光如来に帰命して安樂国に生れようと願ふそのまんまが一切衆生をすくふことになる」との御こころであります。自分は一心に帰命した、これからは一切の衆生を救はねばならぬといふのであれば「即」の字は不用であります。それは佛法を聞いて大憍慢に落ちた姿であります。聖人が終生「親鸞一人がためなりけり」と述懐せられ「親鸞は弟子一人ももたず候」と仰せられる根源は、この天親菩薩の御姿から自然に流れ出たものでありませう。

私は数年前、信友長谷顕性兄をたづねて富山県の礪波郡に参りました。その時長谷さんから、礪波の連山を指ざされて「あの連山の頂を踏み超え踏みこえて、赤尾の道宗は、はるばる連如上人を訪づれ、一句の法文を聽聞しては随喜しつつ帰つたのです」と説明された。私はこの地方の人が、四百年昔の道宗の聞法随喜の姿を、朝な夕な礪波の連山を仰いでは心に浮べ、そこにおのづから聞法せられる姿に転ぜられてゐるのを知り、「聞法即興法」であるといふ一句を貴いこととして教へられたのであります。

左様、切なる聞法が、そのまま興法と転じ、自利のまんまが他利とひらけて行く事実を道宗の姿において知らされ、覚えず襟を正したのであります。

今一つ私の胸を打つことは、私の高校時代に、基督教をかぢり、一灯園生活をのぞいたのでありますが、そこに自分の駄目な姿を知らされるばかりでありました。その当時池山栄吉教授から独乙語を教へて貰うてゐましたが、先生は不思議な徳を持たれてゐて全校の生徒がお慕ひ申して居りました。私が歎異抄を読み初め、六高の親鸞会に入るやうになりまして以来、益々先生にひかれて参りました。さうした頃、私は先生のお宅を訪問して「先生は私の今迄に遭つたことのない人格者あります」と生真面目に申しました。すると先生は身体をゆすぶつて大笑されたのちに「君それは見当違ひだよ、世の中の人は案外人をよく見ると言ふが、同時にまた案外な見当違ひをするものです。もとより人格者といふ言葉には二通りの意味がある。一つはただ温順なばかりで無能力な人を人格者と言ふがさうした意味の人格者とは無能無力者の代名詞にすぎない、その意味ではわたしも人格者と云はれてその心当りがないでもないが、よい意味の人格者と言ふのであれば、これは非常な見当違いである。深く考へなくても、萬人が萬人悪いこと、ひどいことと認めているやうな事でも自分はそれがやめれないのです。自分も我慢の強い、うぬぼれの強い人間だから一寸でもよいところがあればそれを誇りたいのだが、自分はからつきし駄目な男です。それは人がどう見ようと自分が自分でよく知つて居ります。ただせめて人とちつと違つてゐる点と強いて言へば言へないことはないのは、このからつきし駄目な池山に満腔の慈悲を注いで下さるお念佛を頂いてゐる、お念佛を申してゐるといふことだけです」と即座に答えられたのであります。

私はこれをお聞きして二度びつくりしました、それは夜空に皎々と照り輝やく明月に向つて「あなたはほんとうに綺麗ですね」と呼びかけた時「じようだんでせう、わたくしは光などちつともない真黒い塊です、ただあなたに綺麗に見えるのは、皆太陽の光を私がうけてゐる反射ですよ」と答へられたのと同様であつた。

そこに、池山先生の「うしろ姿の御教化」を被ると共にその本源の力、本願、念佛のひかりを愈々渇仰したことであります。

蛇蝎奸詐のこころにて
まことのこころはなけれども
彌陀廻向の御名なれば
功徳は十方にみちたまふ

私共の煩悩に濁りきつた、蛇蝎のこころ、うそいつはりの心のなかにしみとほつて下さる如来のまことのおいのち彌陀廻向の御名のひとり働き以外に、我身のたすけられる道もなく、また有縁の人々へのひかりのかけもないのであります。

聖人のうしろ姿の御教化は斯うしたことを私に教へて下さるのであります。その聖人の御姿に触れては、私自身が常に「名利に人師をこのむ」域から脱し得ないで、何時も醜態を演じて居ることを愧ぢ入るばかりであります。

日本教化の源流〔一〕

三、中世のもの

福島政雄

それから、だんだんと乱世になつてきた時代のことは、殆んど伝説上の太子を仰いでお慕ひ申上げる、かういふ心持のやうであります。これは私共が磯長の太子の御廟に参りますと、御承知の太子の廟窟の銘文といふものが何時頃からか出来て居ります。それを私には見定める力はないのでありますけれども、大体平安朝の中期以後の国民が太子をお慕ひ申上げる心持がだんだんこりかたまつて、誰れがつくつたともわからず、あの廟窟の銘文になつた、かう考へてよからうと思つてゐるのであります。あれは純然たる伝説上の太子を仰いでゐるものでありまして、太子に関する伝説の集大成されたものは御承知の太子伝暦であります。太子伝暦は太子に関するあらゆるつくりごとを寄せ集めて大成したやうなものでありますが、ああいふ風な伝説的な太子を仰ぐところには単に伝説を伝説としてといふことに止まらず、そこに佛教の純な心持が流れてゐると思ふのであります。それはあの御廟を三骨一廟ととなへてをりまして、太子の御母君、穴穂部間人皇后、太子御自身、太子の御妃の膳部の大郎女、このお三方をおおさめ申した霊窟である、それで三骨一廟といつてゐるのであります。そしてこの三方を彌陀・観音・勢至の三尊の御化身である、つまり間人皇后は彌陀の化身である、太子は観音菩薩の御化身である、膳部大郎女は勢至菩薩の御化身である。かういふ風に仰いでゐる。そこに単なる伝説といふことに止まらないで、佛教信仰の上から、日本国民が太子を非常に深い心持で仰ぎ奉りお慕ひ申上げてゐる心持が現れてをります。ことに太子を観音の化身として仰ぐといふ心持には、だんだんと苦しみの世に入つてくる国民が、太子の上に仰いで、感じますところの、佛の慈悲といふもの、心の奥のうるほひ、なぐさめ、落着といふ心持を得て来てをる。そして、この心持がだんだんと純化されてきてをると思ふのであります。

そして、この心持の純化された極致が親鸞上人の太子観であらうと思ふのであります。親鸞聖人と太子との関係は非常に深い密接なものがありまして、これは聖人の内室恵

信尼の手紙によつてわかるのでありますが、弘長二年十一月二十八日に京都で九十歳の齢をもつてなくなられた聖人を最後まで看病されたのが一番末の女の御子、のちに覺信尼といはれた人であります。その覺信尼が聖人がいよいよ十一月二十八日になくなられたといふことを越後の国に住んでゐられた母君恵信尼に知らせられた。その覺信尼に対する恵信尼の返事をみると、太子と親鸞聖人との内面的関係がはつきりわかるのであります。

その手紙を読んで直覚的にわれわれが感じますことは、かういふことであります。親鸞上人が凡そ十九歳かそのころに磯長の太子の御廟に参られて、御廟の中に数日間こもられたものとみえるのであります。その時に聖人の心に非常に深く印象されたのが、あの廟窟の銘文であります。心の底に深く刻みつけられたことであつたでせう。

その後約十年、親鸞聖人は比叡山で修行しても修行しても、どうしても心がはれぬ、心の根本の問題が解決しないといふやうなことで京都の六角堂に百夜こもつて心のやみをはらすやうになりたいといふことで、毎晩毎晩参られたその九十五夜の曉方であります。本尊の観世音の前に坐つてをられますと、夢ともわかず、うつつともわかず観音の御示現があるのであります。その御示現は何であるかと申しますと、あの聖人の御伝鈔の中に出てをりますところの四句の偈文であります。

行者宿報設女犯　我成玉女身被犯
一生之間能荘厳　臨終引導生極樂

この意味は、行者が宿世の業報によつてたとへ女犯すること、結婚生活を送るくらいの意味に解してよいと思ふのでありますが、さういふことになつたとしても、自分はその場合に玉のやうな女となつて、その妻となるであらう。そして一生の間よくその行者の身を荘厳して臨終には、その行者を導いて極樂に生ぜしめるであらう、かういふことになるのであります。さういふ風な御示現のあつたことがいまの恵信尼の手紙をみますとわかるのであります。

さうすると、親鸞上人は佛法といふものを深く味つて人生を歩んでゆく歩み方といふものを、聖徳太子によつてはつきりと知らしめられた。つまり聖徳太子は親鸞聖人の人生の導きにおいて大事な内面的な導きをされた、と感ずるのであります。それはこの四句の偈文の中でもはじめの宿報といふことをよほど重く見なければ、この偈文の心持は味はれないわけであります。宿世の業報によつて自分が妻帯し結婚生活に入る、その業報といふ感じは、結婚生活といふものについての痛切な一面をそこに感じての言葉であると受取らなければならぬ、かういふことを私が浄土真宗の信仰の上でお導きをうけた近角常観先生がいはれたの

であります。宿報といふものを決して軽い氣持で受取つてはならぬ、さうでないとこの偈文が、何だか非常に甘いものに聞える、さういふわけのものではない、銘々の自分の結婚生活を考へてもわかるではないかといふことを仰言つたことがありますが、さういふ心持、結婚生活についての、嚴粛な、また痛切な心持を内面的に、伝説の聖德太子によつて開かれてをつた、そして親鸞聖人は親鸞聖人の途を歩まれたのであります。そして最後に聖德太子に対して、どういふ心持になつてをられるかといひますと、あの皇太子聖德奉讃といふ御和讃が示す通りに、觀音の御化身として、父のごとく、母のごとくにおはします、かういふ心持で聖德奉讃十一首をつくつてをられるのでありまして、晩年になるとかういふ心持を深くされてゐるのであります。

そんなところから考へまして、中世における聖德太子の仰ぎ方、仰いだ人々の心持の中でも、親鸞聖人ほど純粹に一筋になつた人は他に類が少からうと感じてをります。つまり中世の聖德太子觀の中でもつとも深味があり、美しさを持つものは聖人の太子觀にきはまるといつてよからうと思ふのであります。さういふ風に、中世の乱世においては伝説上の太子、觀音の御化身としての太子を一筋に父のごとく母のごとくに慕ふといふところまでいつてゐるのであります。

（以下次号）

私の信仰

和才誠司

世間に私ほど、平凡なものはない。その平凡な私に、慈光誌に何か書けと言はれるが、洵に怒縮至極である。聽き手であつて書くことの出来ぬ私であるから御断りしたが、重ねての仰せに從うて、私の現狀を告白させて頂いて御教示を御願ひ申します

私は眞宗信者の家庭に生れ、幸にして学生の頃、近角常觀先生の御縁に遇ひ、陸軍士官学校在学中から、先生の御教化を蒙り、陸軍在職中も、其の後も先生唯御一人の御教を仰いでいたから、信仰の上にも、処世の上にも何等の不安なく順調に過さして貰ひました。

今回の支那事変、大平洋戦争には老齢のため、内地に勤務し、終戦の際は対馬要塞の守備をさせて貰ひ、ながい戦

争の間、外地に出して貰ふ機会がなく、これがために多くの先輩や戦友は犠牲になつたが、私は逐に死に損ねて、未だに人様の御厄介になつてゐる。

斯くの如く、私は世間普通の行路を辿つて今日に及んだが、此平凡な生活が、大慈大悲によつて生かされ、実にありがたいことである。子供が二人生き残つてゐるが、二人とも健康で各独立の生活を営み、長男は大牟田に勧務し、長女は、門司に嫁し、私は妻と二人で福岡にて悠々、晴耕雨読の余生を送つてゐる。耕すと云つても僅か猫額大の宅地に花草野菜を弄ぶに過ぎず、至極閑散であるから自然に御法縁に遇ふ機会に惠まれ、御法話を拜聽し、倦怠な私に活を入れて貰うてゐる。

さて御寺に参詣さして貰つてゐると、善知識同行の間に信心を得たとか、得られぬとか、異安心だとか、さまざまの議論がある。御佛の絶対の御慈悲には変りないが、御互の悩みが違ふから、各々その特異性にもとづき、その歓びはそれぞれ異るであらうが、私の考えは一切役にたたぬ。唯御慈悲一つに満足する以外には途がない。愚鈍な私には近角先生を通しての御教化が、私の日常生活の実際面に触れ、身近かに頂かれてありがたい。外の善知識の御教化も実にありがたい。毎朝ラジオの宗教放送は宗教宗派を越えどなたの御話もありがたく拜聽してゐる。

実に念佛は総てが肯定せらるる世界で、日日起る身の廻りの鎖細なことから、大は新聞ラジオに依つて報道せらるる世界の大問題まで、一つ一つ成る程さうかとうなづかれ御教の御直実を日日新に感得させて貰つてゐる。

人なみに働いて喰べてゐた時は左程にも感じなかつたが、追々老衰して働く力の消耗するに連れ、人様はあんなに働いてゐるのに、老ひたりとは云へ、なまけてゐて実に勿体ないことで、衆生の恩が身に泌みる。

七十歳に近い老の身には老少不定と云ふやうな、なまやさしい言葉でなく、現実の問題として人生の淋しさをひしひしと感ずる。

「久遠劫よりいままで流転せる苦悩の旧里はすてがたくいまだむまれざる安養の浄土はこひしからずさふらふこと、まことによくよく煩悩の興盛にさふらふにこそ、なごりおしく思へども娑婆の縁つきて、ちからなくしておはるときに彼の土へはまひるべきなり。いそぎまいりたき心なきものを、ことにあはれみたまふなり。これにつけてこそいよいよ大悲大願はたのもしく、往生は決定と存じさふらへ」

との歓異抄の御教化、まことに幸なるかな。

大慈大悲の親様、往生の親様、救済の親様の御手に曳かれ、敗残の身に生々発展の生きぬく力を惠まれ「死ぬじや

御座らぬ、帰るでござる、西の都の親里に」の「いのち」と「ちから」を與へられ、枯木に花の咲いた氣持で世間のすべてが肯定され 日々新に 最後の日まで樂しく力強く生きぬいて行かせて貰ふ仕合せを細々歓ばせて貰つてゐる。

斯く申し上げると如何にも美しく聞えるが、実は私ほど強欲で短慮で愚痴つぽいものはない。唯御慈悲一つに生かされてゐる極悪人である、何卒大方の御教示を御願ひします。

昭和二十七年 十月。

凡禿ノート〔3〕

――信仰と体験――

長岡高人

信仰は、その意義内容を異にするとは云へ、一般にその願ふところは、いはゆる信仰奇蹟の体験である。その意味では人間の力を超越した奇蹟を願はない宗教はないとは云へよう。そしてその奇蹟の体験が、信仰者への生活において解脱新生の光明となるところに、信仰の持つ人生的意義があると云はなければなるまい。

然しその奇蹟といふものは、唯殊更にそれのみを望んで得られるものではなくして、実は信仰そのものの体験の純粋化によつておのづからにして與へられる、自然法爾の結果なのであろう。そしてまた、その奇蹟といふものの意義内容をどのやうに領解するかによつて、その根本をなす信仰そのものの在り方にも大きな影響をもたらすことのやうである。ここに奇蹟といふものの持つ、信仰上の大きな畏があると云はねばならない。

先づ通俗的な信仰は、信仰奇蹟を、いはゆる現世利益の上に求めるものであらう。卜相、占卦、加持、祈禱等の俗信の類から、新興宗教の多くは、殆んどこの現世的な利益を内容とする奇蹟をねらつて、その信仰を鼓吹宣伝してゐる。勿論一言に現世利益とは云つても、その内容には単に利殖繁昌を求め治病平安を祈る如きものから、更には人格の向上、世界平和を目指すものまで、その間には種々雑多な種別段階あるものではあるが、しかしそれらは一括していはゆる結果主義の信仰といふことが出来るのではあるまいか。勿論全然結果を予想せざる信仰といふもののあり得ないことは云ふまでもないが、しかし動機が正しいもので

なければ、結果に正しいものが現れる筈はないのである。この点では結果主義の信仰は、その信仰動機の反省において、甚だ至らざる錯誤があると云はねばならない。従つていくら信仰してみても予想通りの結果が現れなければ、深刻な懐疑動揺を来たして、却つてその信仰自体を反目呪咀するといふ反動的な態度に陥ることにもなるのであらう。

次の一節は、凡禿さんが世間のいはゆる四十二の厄年を送つた頃の感想である。

「私は、本年四十二歳、俗に世人は厄年といふ年だ。先づ年の始の二月は父を失ひ、その後次ぎから次ぎと経済問題や何やかやと問題が湧いて来る。がしかし、どの問題だとて、一つとして意外と思ふ事件はない。始めから判りきつてゐながら、その始末をなし得ずに、ぐずぐずして今日に至つたもので、その結果として、今目前に、現れた事ばかりだ。父の死といひ、経済問題と云ひ、一つとして、厄年なるが故にと、その方へ廻すべき事件はない。すべてが私の業の現れだ。従つて唯それをそのまま受けてゆくだけだ」

昭和一〇、九月

「世間で云ふ厄年をやつと送り、四十三歳を迎へて、ホツとした感じが胸の奥底にひそむ。厄年なんぞといふ事は、別に何でもない事とは知りつつも、現実の自分としては、明日何が出るか知れぬ弱身から、つひ心のどこかにそんな思ひがひそんでゐる事が、情ない。大きなお慈悲のお育てを受けながら、餘りにも惨めな心の頼りなさを、しみじみと味はされる。

〇〇教の檢挙を耳にしたとき、相当に知識階級の人々の存在してゐた事実を知り、宗教の世界は、全く知識、学問の世界ではないことを痛切に味はせられた。平素は位階や学問に権威を持たされてゐる人々であつて、厭禁(まじない)だ八卦だ巫女(みこ)だと卑しんでをられた人々なのである。

それが一旦病人がどんどん続いて出たり、或は死人が次から次に現れたりした時、果して平氣で心安らかに居られるであろうか。結局は溺れる者は藁をも摑むの心理で、そこには位階も学問も消え失せて、つい今まで卑しんでゐた迷信に入つて了ふといふのも、またむべなるかなとうなづかれる」

昭和一一、一月

信仰といふものは、自然発生的にはこのやうな人間存在の根源的な弱線に沿つて発達して来たものであることは疑ひあるまい。人間の現世的な本能欲求を皆満足させやうといふ、自然主義の生き方を目標とする信仰の低俗なことは論外であるが、人間の生命の根本問題としての、生老病死といふことを危急切実な課題として感じない限りは、信仰

などは人生における無用の長物であらう。

滅びの自覚、「自分はこの世から滅び去らねばならぬ」といふ根本的な苦悩、この憂悲懊悩といふものを心の中心問題として体感するところに、始めて正しい宗教の門がひらかれるのである。

「死!!こればかりは厳粛な事実だ。これには全くごまかしがきかない。お葬式に逢ふ度に、迂闊な、ややもすればだらしのない自分が省みられ、わが師に出逢うたやうな氣がする。身をもつて私を導き給ふ、尊いお姿を拜まざるを得ない」

昭和一六、九月

実に、この滅びの自覚に徹底せずして、中途半端な現世的利益の限界に止まるものは、ある意味では真実の宗教に到り着くための迂路道程に止まるものと云はなければならない。凡禿さんは、種々の宗教を評して、一言の下に「皆、お念佛に到達するための善巧方便さ」と大胆に結論して居られたことがあるが、これは凡禿さんの真実信心に対する自信の程を絶対的に表明されたものとも味はれるし、また各種の宗教に対して、念佛信仰を中核とする階段的な見方を持つて居られたといふ豊かな見識を示してゐるとも考へられる。

そしてまた「お念佛は、生活における本当の力である。もしお念佛といふものが、生活に力を與へないやうなものならば、俺はそんなものは捨ててしまふよ」とも語つて居られた。これは勿論、真実の信仰は、そのまま人生の真実の力であり、真実の力といふものは、真実の信仰生活に帰入するところに獲得されるものであることを強調して話されたことであらうと思はれる。それではその真実の信仰とは何であるかについて、凡禿さんは次のやうなことを述べてをられる。

「あるお方が私の家に飛び込んで来て、佛教のお話を聽かして下さいと申されましたので、佛教のお話を申すこともよろしうございますが、一体何の目的で佛教の教が生れたのかそのお話を聞けばどうなるのか、そのことを明瞭にせずに、佛教のお話を聽く人が多い。失づ肝心なのは佛教で掲げてある看板をよくみてお話を聞くことだ。酒屋の看板をみずにひよいと店に飛び込んで、お團子をくれと云うたとて、その注文は満たされる筈がない。

それでは、一体佛教の看板は何であるか。それは唯『転迷開悟』の一語につきる。ややもすれば、人格の完成、家庭の平和、世界の信用、お金がたまるやうに、身体が丈夫になるやうに等の目的で、佛教の御教を聞く人が多い。從つてその要求が満たされる筈もない。先づよくよく看板を

見ることが大事だ、と申しましたら非常に喜ばれて、がつしりと私の話を聞いて下すつた。

昭和一一、六月

ここにいはゆる「転迷開悟」とは、滅びの自核を中核として一筋に信仰を求めて来た心が、滅びる現実を何等かの相対的手段によつて逃避しようとする「迷ひ」の想念を転回して、滅びる現実を絶対逃避し得ない滅びる現実としてそのままそつくり肯定しきる外はないのだと「悟り」得しめられるといふことなのではあるまいか。

「無常とは、よいことが悪く変ることばかりではない。悪いことがよく変ることもまた無常なのだ。この世の中において、何ものか変らずに居るものがあらうか。一日だつて一秒だつて。だが、さう明らかに見せられて居ながらもなかなかにそこにしつかりと腰がおちつかぬ。

何時の間にやら変らぬものを握つてゐて、蹴つまづいた時、始めて目がさめる。そして狼狽する。よく変ることは自分の努力のあらはれとうぬぼれで、悪く変る時だけうろたへ騒ぐ。全くあさましい限りだ」

昭和九、十一月

実眞の力

「閻浮壇金と言ふ宝の玉を地に置くと、その玉の持つ力で段々に地の中に沈んで行ぎ、遂には岩磐、地殼にまで徹達する」と佛は説かれてゐる。

これは実語、真実がそのまま言葉になつたもの、さうしたものを若し一度耳に聞き、目に見ると、それが段々心の奥深くとどけられて、遂に身心に徹する、さう云ふことを教へられてゐる。

十年前、二十年前に聞いたこと読んだことが、何かの機縁から身心に徹して、生きたまことと転ずる、それは蒔かれた種が秋を送り冬を堪えて、春光に芽萌えるに似てゐる。

真実は必ず徹する!何と言ふ力強いことであらうか、また何といふ有難いことであらうか。

飯倉だより　藤村

すべてのものは過ぎ去りつつある。その中にあつて、多少なりとも「まこと」を残すものこそ、眞に過ぎ去るものと言ふべきである。

弱いのが決して恥ではない。その恥しさに徹し得ないのが恥だ。

編集後記

慈光誌発刊以来、誌友となつて貰つてある北多摩の全生園内の愛知県人会の方から冊子が送られて来ました。一読して狂喜させられましたことは「昭和二十二年以来、治療に実施せられたブロミン、ブロゾール、ダイアゾン等の新薬によつて今日では、癩の重症に苦しむものが殆どなく、療養所内の空氣は数年前に比べて面目を一新した」との記事であります。

今迄は極く僅かな自然治癒的なことにしか望の持てなかつた難病への黎明のひかりが射し始めたのであります。病患の方々の歓びは私共には察することも出来ないが全く言語に絶することでありませう。この溢れる歓びが冊子となつて「自宅療養される方々は一日も早く入園せられて新治療をうけて下さるやうに」との切々哀々たる叫びと訴へが紙面に盛られてあります。

私はこの冊子を念佛のなかに読ませて頂き、法然聖人の浄土念佛宗の立教開宗の大宣言をせられた御心事に触れ、曠劫流転の光なき身にしみとほる念佛無碍のひかりを仰ぐことであります。

△「日本教化の源流」は中世における聖徳太子の感化の純粋なものを教へられました。巻頭の聖人の太子讃と併せて御味読願ひます。先生は神戸大学明石分校に勤められて、横須賀と明石とを往復して居られます。

▽「私の信仰」は福岡市大坪町二丁目四八御在住の和才誠司翁から頂いたもので他力の信の至極を簡明素朴に表白して下さつたものであります。翁は別府の妙好人安波医師の胃癌で亡くなられるまで無二の信の友として親しまれた方で、遠く深い信の旅人であります。原稿にありますやうに「念佛はすべてが肯定せられる世界である」との法味は、大海の萬川を容れて静かな如く、善悪そこ抜けの信嘗、無碍の信光であります。

▽「凡禿ノート」は清水凡禿さんの信味を鏡とされた信心の風光を浮彫して下さつた尊い記録であります。これも長岡氏の長い重い病苦を縁として如来の徳音を頂かれた体験が基盤にあることを思ひ併せて頂き度いと思ひます。滅びの実相をそのまま受け取られて、天地晦冥、山河皆崩れ去る中に、久遠の真実にひらかれて来た妙境であります。第二第三の凡禿居士の地に現れて下さることを念じてこの原稿をおとどけ申上げます。高岡さんの住所は盛岡市鹿島下四の三であります

▽「聖人のうしろ姿の教化」は愚禿の底から自然にひらかれた自利即他利の徳風であり、そこに三世十方を隈なく照し貫ぬく光りを頂くのであります。

大聖釈迦牟尼佛の御前に、いづれの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定すみかぞかしと、全身を投げ出された聖人の心底に、そのものをこそ救はずばやまじとの、慈悲円満なる彌陀佛の本願が徹到し、そこ一つを九十年の生涯かけて深く信嘗された御姿、ここに未来億億の衆生の救済の扉がひらかれたのであります。攬教照心、祖師のみあとを慕ひまつることであります。

昭和二十七年十一月十日 印刷
昭和二十七年十一月十五日 発行
毎月一回十五日発行
定価 一部金拾七円（郵税共）
半年金百円（郵税共）
一年金二百円（郵税共）
名古屋市南区駈上町二ノ二八
編集兼発行人 花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人 富田陞
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷所 千草印刷所
名古屋市南区駈上町二ノ二八
発行所 慈光社
振替口座番号 名古屋一〇四七〇番

慈光 第四巻第十号昭和二十七年十一月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可